

の他最近伸びつつある観光業、安いが値の安定した蚕豆等との関連で、白浜町の花弁産業は独自の位置を占めている事が判明した。房州の花弁産業は新しい方向へ脱皮する地域と、現状維持の地域とに分かれ、今後進行するであろう。

## 山形盆地北部の農業土地利用

塚 本 詔 子

調査地域は山形盆地の北部で、主として最上川の兩岸の乱川扇状地と寒河江川扇状地である。東北の内陸盆地の一例としての山形盆地は、産業構成から見れば農業が圧倒的であり、土地利用は概していえば水田単作地帯の一つとして著名な所である。しかし特に乱川扇状地の方は、この傾向に反して畑作が卓越しており、いわゆる扇状地の土地利用の特徴がみられる。本論文では農業土地利用の面から、東北の内陸盆地の一例として、その地域性をとらえることを試みた。

論文の構成は次のとおり。

- |   |  |
|---|--|
| 第一章 山形盆地の概説 — (1)地形配置及び<br>地質 (2)気候 (3)農業土地利用。                      | 第三章 乱川扇状地における果樹栽培の発達。                                |
| 第二章 山形盆地北部の自然・人文 — (1)地<br>形分類 (2)河川及び地下水 (3)産業<br>(4)集落 (5)農業土地利用。 | 第四章 乱川扇状地の農業土地利用の特性 —<br>(1)立地条件 (2)果樹栽培。<br>第五章 要 約 |

農業土地利用を概観すると、乱川扇状地は湧泉帯以東は扇側部・扇頂部にわずかに水田がみられるほかは、すべて畑であって、その中でも野川を境として以北はたばこを主体とする普通畑、以南はりんごを主体とする果樹園となっている。一方寒河江川扇状地は、扇状地面は90%以上水田である。このように両扇状地は農業土地利用景観からしても地域区分がかなり明確にできるが、農家経営の面から見ると一層はっきりする。即ち山形盆地北部の傾向として、単一経営農家が約80%を占めており、水田地域はいねの単一経営であり、畑作地域では工芸作物単一経営、あるいは果樹単一経営となっている。そのほかは主に水田地域と畑作地域との境界に当る湧泉帯附近や山麓及び扇側部、最上川段丘面に位置する地域は、いねと畑作物の複合経営を行なっている。

農業土地利用の変遷をみると、水田地域は歴史も古く、集落の発生と共に開田され、明治以後、最近に至るまでほとんど面積的变化はない。畑作地域は主に乱川扇状地の扇体であるが、扇中央部の開墾以後、変化がみられる。1936年あるいは43年の開拓入植と果樹栽培の成功がきっかけとなり、養蚕業の不振に伴って以前畑作地域に於て支配的土地利用であったたばこ栽培は地域化され、

果樹栽培が扇面一帯に卓越するようになった。

経営耕地の規模は、水田地域も畑作地域もほぼ同じで、平均約0.7～1.0haであり、専業農家は少く農家総数の約17%で、第一種兼業農家が約51%である。東北地方の特徴として冬期の出稼ぎが多く、第一種兼業農家の約30%は出稼ぎを兼業としている。

水田単作が卓越する東北地方に果樹が導入される時、その投機性のために水田との複合経営の方法をとるのが一般であるが、乱川扇状地では水田を開くよりも、果樹栽培あるいはたばこ栽培の単一経営の方を選んでおり、果樹地帯では地域的・面積的広がりを背景に作業の共同化が普及しつつある。

## 静岡県駿東郡裾野町の地理学的研究

西 山 京 子

本論文は都市・工業化の当地域への影響という点に主眼を置き、且つ当地域の性格を把握することを目的とした。

論文の構成は次の通りである。

第1章 調査地域の自然環境では、調査地域の位置・地形・地質・表層物質・水系・気候をとりあげ、調査地域全体の自然環境について述べた。特に表土下には「富士マサ」と呼ばれる特殊な盤層が存在し、農業に大きな影響を与えていること、富士熔岩に覆われて地盤が非常に堅固であること、表流水が得にくいこと等が、本地域の主な自然的特色となっている。

第2章 人文概説では、本地域の歴史・集落立地の要因及び東富士演習場とそれに関する諸問題についてとりあげ、特に本地域の特色である東富士演習場関連事項に重点を置き地域性の一端を示した。

第3章 農業では、農業概観・農業用水・代表的農作物・畜産について述べた。本地域は専業農家が非常に少なく、僅か6.7%にすぎないが、その割合は地区によって異なり、須山地区や深良地区は2%台にとどまっている。これは農業経営と密接な関係があると考えられ、各地区の専業農家の割合と農業経営との関係についてみた。代表的農作物として水稲と芝をとりあげ、特に他の農作物と収益や投下労力および経費の面で比較しながら、芝栽培の優位性について述べた。畜産については酪農・養鶏・養豚をとりあげたが、広大な草地を必要とする酪農経営は草地が少ない本地域では振わず、今後も発展するものと思われない。一方養鶏や養豚は草地を必要としない代りに、大部分購入飼料に依存しているが、それらの需要増大に応じて、今後も発展してゆくものと思われる。

第4章 都市・工業化の影響では、近代工業の進出、別荘・住宅地としての開発、都市・工業化